

Title	フランス革命史研究者のために：ブリントン氏の書籍解説から
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.3 (1936. 11) ,p.101(465)- 128(492)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19361100-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス革命史研究者のために ——ブリントン氏の書籍解説から——

間 崎 万里

はしがき ペーベーム大學教授 W. L. Langer 博士鑑修の
下に日本刊行中である *The Rise of Modern Europe* と題する
叢書(全二十冊)は、中世の終末から現在に至るまでのヨーロッ

パ史の政治的、經濟的、文化的方面を概説せんとするものであ
りて、初學者と大學生にとり絶好の入門書である。既刊の諸冊
には何れもその巻末に頗る便利な参考書目とその解説が掲載さ
れてゐる。中にも同大學の Crane Brinton 教授の *A Decade
of Revolution 1789—1799* (N. Y. & London, 1934) は、フ
ランス革命が近世史上の最大事件の一であつて、諸種の方面か
ら近世史研究の権軸をなすだけあつて、何人にも興味あるべき
部門であるが、その巻末の *Bibliographical Essay, pp. 291—
322* は、特にこの時期に對する初學者入門として最も好適であ
るので、平素頻發する學生の質問にも應すべく翻訳載する
ことにした。

フランス革命史研究者のために(間崎)

I 修 史 概 觀

第三共和國の建設は、フランス大革命の起原の研究に新
たな刺戟を齎したが、しかしこの研究の最初の成果は、殆
んど革命的傳統に資するものではなかつた。實にテースの
有名な『現代フランスの起原』(後述)は、一八七八年にそ
の第一卷を刊行して以來革命反對論の中権となつてゐた。
テースは、その教養も氣質も文學史家であり、思想史家で
あつたが、彼は獨佛戰爭の不幸を憤つて、これを説明せん
がために、或は寧ろその責任を負ふべき誰かを發見する
とに、主力を注いだのである。彼は明かに悲劇的な現代フ

ランスの起原を、ルイ十六世のフランスに見出したのである。正統共和主義者の何人もテームほど舊制度の暗い光景を描いたものはない。その所得の五分の四を租税と封建的課税に費やした農民や、その司教區の收入を世俗の榮華に浪費した不信心な司教達や、饑餓に瀕した寺區の司祭や、ヴェルサイユの人爲的浮華や寄生的榮達の間に陰謀を回らして所志を遂げんとした大貴族達や、空虚な儀禮の渦巻の中に囚虜となつたお人好しの國王など、舊い言ひ草はすべて本書の中に記されてゐる。かくてテームから見れば舊制度は全然不満足な社會、改革されねばならぬ社會であつた。がしかし革命の道を開いた改革者達は、彼等自からがこの腐敗制度の成果であり、思想的には、少なくともデカルトの頃の間違つた哲學に養成されたのである。テームの著作の中心は彼の所謂『古典的精神』なるものを論議するにある。彼の論據は根抵に於てはバークのそれと殆んど同じである。フランスの所謂『哲學者』(即ち當時の啓蒙學者)は政治生活の苦しい現實から正しい道理の雲の國に向つたのである。ラシースやその一派の古典的藝術から(しかしテームは自然科學には第十九世紀流に滿腔の敬意を拂つてゐ

たので、ガリレオやニュートンの科學からではない)抽象的なるもの、典型的なるもの、普遍的なるものを追及し、個性的なるもの、具體的なるもの、特殊的なるものを閑却せんとする傾向を受け繼いで、彼等はこの偶然的な世界に於て全く非現實的な『自然の權利』の體系を構成した。舊政治の財政上無能力なることが彼等に機會を提供するや忽ち『哲學者』の門下達は是等の抽象論を具體的な制度の上に實現せんと試みた。その結果は一七八九年乃至一七九二年間の『自然に發生した無政府狀態』であつて、之からたゞ一時的にフランスを救つたものは一七九三—四年のジャコバン黨の獨裁であつた。この獨裁は全く暴力に基盤を置いていたもの、別言すれば『哲學者』達の抽象的なユートピヤを全く非ユートピヤ的な方法によつて實現せんとしたものであつたので、これは一層世俗的であるけれども、不當に厳格不自然なナボレオンの獨裁に譲らねばならなかつた。テームの現實の敍述は頗る充實したもので、大に文書を涉獵した結果である。テームは地方に進行しつゝあつた事象に大なる注意を拂ひ、斷然『モニター』や同種の公けの資料に依頼することを止めた。オーラールはもちろん、彼が

文書の引證法を誤つてゐると考く、その誤謬を指摘するため『ハーナー革命の史家テーム』(Taine, historien de la Révolution française)として一書を著した。オーラールの批難は大部でいふかほんくは瑣事に拘泥したものであつて、テームの著述を顛覆するほどのものではなかつた。精々言ひ得るところは、テームがジャローバンの暴行の例證を故意に探し出してゐたことと、彼がある地方に於て比較的平穏な長い期間の中に一つ凶惡な行爲を發見するや、彼はんの行爲を覚えてゐて長い平穏を忘れて仕舞ふことである。テームは彼の時代のフランスについての悪事をよく心得てゐたけれども、それを如何にして矯正すべきかについては知るところがなかつた。恐らく彼の書物の中に具體的な計畫を示せなかつた。英國文學史の史家テームはイギリスの實踐的な政治感を非常に賞讃した。『現代フランスの起原』の讀者は、テームがフランスの救濟をば、革命的イデオロギーを放棄し、過去を敬ひ哲學者と法律家を嫌へる成功した實務家によつて治むるブルジョア社會を受容するにありと感じてゐたと思ふのである。

オーラールも亦一八七〇年の所産であるが、しかし新共

フランス革命史研究者のために（間崎）

和國に於ける希望に充ちた向上的要素の成果である。オーラールはソルボンヌに於けるフランス革命史最初の講座を擔任し、この有利な地位を利用して學究的な職業的歴史家の公けの學派を建設し、之が爾來フランスの國家的高等教育と同一に見られることになつた。彼は、歴史が史料の考證及び使用法にてきそれ自からの特殊の技術を有する科學的な學科たるんとを意識的に確立しつゝあつた當時に於ける時代の產兒であつて、長壽を保てる彼の晩年には彼との門下が革命の客觀的科學的歴史を獨立してゐた。第三者からすれば、彼の出發點は科學的眞理に對し公平無私なる尊敬を拂ふと共に、少なくともテームに反對して革命を擁護せんとする熱烈な希望に燃えてゐた様に見える。オーラールはんの主題の研究に宛てられた専門の學術雑誌『フランス革命』(Révolution française)を創立して、一九二七年その死に至るまぢ回説編輯の任に當つてゐた。彼は論文及び單行本に仕上げた多量の研究の外、革命の全般に亘る『ハーナー革命政治史』(Histoire politique de la Révolution française)を著作する餘裕を見出しだ。オーラールはかなり無趣味なフランス語を書いたが、彼は文章を輕蔑

してゐた。オーラールは彼の持たない文才をば、彼が多分に持てる黨派的熱情よりも、歴史的客觀性に有害であると明かに認めてゐた。彼の著書は明晰であつたが、常に興味を持つて讀むことは困難であつた。本書は表題の示す如く純粹の政治史であつて、『公けの』資料、即ち革命家自身の作つた演説、報告、新聞記事に基盤を置いたものであつた。オーラールは當時の大多數の史家と同様にメモア（手記）、特に革命に敵意を抱ける人々、例へばテーズが大に依頼した知事モリスの如きのメモアを信じなかつた。オーラールは『歴史の哲學』（これは職業的史家の間に今なほ大に不信用である）を喜ぶ一般思想を否認したが、それでも彼の『政治史』はコシヤンの所謂『事態説』（*Thesis of circumstances*）で恐嚇政治を説明せんとする廣汎な概括を基礎としてゐる。オーラールに従へば、恐嚇政治は國防の政治に過ぎないものであつた。内亂外戦に迫られ、山獄黨に強ひられた獨裁政治であつた。彼は一種のグラフを引かうと試みた。このグラフに於て強烈な恐怖の高點、九月虐殺、一七九三—四年の大恐嚇政治は、正に革命のフランスの敵者にとのての成功の高點、即ち一七九二年のプロシヤの侵

入、ヴァンデーの叛亂、チューブリエの叛逆など、一致する。しかしオーラールをも無視することの出來ぬ一つの重大な相異點があつた。フランスにとっての最大の危険は一七九三年十二月までに出會し、一七九四年の春は内外に於ける共和の武器の勝利であつた。しかもギヨチームの最大活動は一七九四年の晚春初夏の交であつた。恐嚇政治は勝利に六ヶ月後れたのであるが、このことは『事態説』では容易に説明し難いのである。

オーラール門下の秀才アルベール・マチニスは夙に現世纪の初にその師と断ち、彼自らの雑誌、初には『革命年譜』（*Annales révolutionnaires*）後か改題して現在の『ハラーベ革命の歴史的年譜』（*Annales historiques de la Révolution française*）を創立した。マチニスも亦厳格な訓練を経た職業的歴史家であつた。彼は主として宗門及び經濟の歴史に於て多量の學問的研究を仕遂げた。しかし世界大戦の直後、彼は簡単な大衆向の革命の記述に筆を染め、一九三一年急死の際には總裁政府の初まで進行してゐた。彼はオーラールの死ぬまで熱烈な論争を繼續したが、彼とオーラールの筆戰は、表面上ダントンとローブスピールの人

物論に集注されてゐた。兩者は近代フランスは革命の英雄及びもちろん悪漢を必要としたと感じた。オーラールは粗暴な愛國者で常識の人ダントンをこの英雄とし、その宗教的野心のために革命を犠牲にした、術學的な、空虚な無駄な理想家ロベスピエールをこの悪漢とした。マチエスは達識ある民主主義者で實際的社會改革家なるロベスピエールを英雄とし、私腹を肥やさんがため何時でも革命を裏切らうとした腐敗せる好色の陰謀家ダントンを悪漢とした。實はダントンとロベスピエールは、その人物よりも遙かに深刻になつた異論の象徴に過ぎなかつた。オーラールは世界を、隨つて革命を、反僧主義の熱烈な愛國的の善良な共和主義的ブルジョアの又經濟學及び倫理學上に於ては舊派の個人主義者の、希望と心情即ち評價を以て見、革命の中にブルジョア、第三共和國に役立つべき神話を求めたのである。フランシュ・コンテの賤しい農民出のマチエスは世界と革命をば、階級意識的なプロレタリヤの希望と心情を以て眺めたのである。その師と同じに反カトリック的な彼はオーラールの個人主義的な倫理的社會的な原理の十分さを疑ひ、一層空想的な民衆的信仰の必要を感じた。彼はそ

近代的形態をとれるナショナリズムを信じなかつた。彼は常に黨派的社會主義者たることを否定したけれども、一層粗雑なマルクス主義者直傳の歴史の經濟的解釋を承認し、經濟的放任主義の酷評家であつた。マチエスは恐嚇政治を外戦内亂の成果であるとするオーラールの説明を受容した。けれども、この説明に、一要素を加へて之を全く變化させた。簡単に言へば、この要素は階級鬭争である。恐嚇政治の獨裁は國防の政府たるのみならず、又プロレタリヤの未熟な獨裁であつた。この獨裁を支持する二要素、ブルジョア愛國心とプロレタリヤ共同責任感の中、前者はなほ產業革命の洗禮を蒙らないフランスに於て無限に強力であつた。一七九四年の勝利と共に、國防政府の必要が止み、一七九四年の春及び初夏に於て、恐嚇政治はロベスピエール、サン・ジュスト及びその一味によつて、全くプロレタリヤ独裁として使用せられた(風月の諸法令)。私慾なブルジョアの利益は強過ぎて民主的共和政をなさしめなかつた。ロベスピエールの没落と共にこの最初の不完全な社會主義の経験は亡びた。後述の如く兎に角マチエスは、恐嚇政治が勝利の後に六ヶ月も遲滞したことの説明を與へた。彼は恐

嚇政治の現實の目的を與へた。マチヨスの前に社會黨の政治的首領ジャン・ジョーレスによる革命の經濟的解釋があつた。ジョーレスは議會生活の閑散時を利用して、現世紀の初年に『フランス革命の社會史』(Histoire socialiste de la Révolution française) を書いた。この書は社會史にとり新史料に充ち、ローベル派の公定價格とか農業計畫とかが如き、特殊問題に新方面を開拓した。本書は整頓した研究ではない。面白く読み物でもない。ジョーレスの著述の長所はマチエス及びその門下の著作の中に攝取されてゐる。

公けの革命史學派（大部分は大學及びリセーの教授である）はマチエスを奉ずるものとオーラールを奉ずるものとの間に分裂をつけてゐる。概言すれば、この分裂はフランスの政黨政治に於ける一方社會急進黨（決して社會黨ではない）と他方社會黨及び共產黨との間の分界線に従つてゐる。各派は専門の雑誌を有し、オーラールの『フランス革命』誌とマチエスの『フランス革命の歴史的年誌』を繼續してゐる。何れも特に地方史の領域に於て絶えず新史料の發表に熱心な研究者を數へる。共和黨兩翼間に於ける接近

の痕跡は認め得るやうである。特にローベル派とダントン派間の爭論はなくなりつゝある。若き職業的史家の一部、例へばガストン・マルタン氏やジルジ・ルフェーブル氏の如きは、オーラールとマチエスの著作の綜合を我等に供給するやうねむつ（この接近の證據としては、ルフェーブル氏の『ローベル』に關する項目[Encyclopædia of the Social Science, XIII, 413. New York, 1924]を見よ）。

オーラールが公けの共和史學派の開祖であつた如く、テーズは王黨の、或は少なくとも反革命の史學派ともいふべきものゝ開祖であつた。その最も有力な代表者はオーギュスタン・コシヤンであつて、彼が最近の戰争に早世せることとは前途の最も有望な生涯を切り縮めたものである。コシヤンは決して革命の完全な歴史を書きはしなかつたが、丁度大戰間際に出版せる彼の簡単な『思想の社會』(Sociétés de pensée)は少なくとも革命の完全な哲學である。コシヤンはテーズの著作を解釋し、彼自身の著作の基礎として彼の所謂『意圖說』(thesis of plot) を修正した。『プロット』といふ語はベリヨン師からネスター・ウェーブスター夫人に至るまでの偏頗な保守的史家に有難がられるメロドrama的陰謀を暗示するので、不幸な言葉である。テーズもコシヤ

ンも本當は『アラン』即ち『頑固な少數派の社會的意圖』を示す以上に餘り強い意味を持たないのであつた。要するに、コシヤンはオーラールの『事態説』に反対して、恐嚇政治は地上天國の實現を企てる『哲學者』の著作に動かされた強壓團體の獨裁であるといふ説明を提起した。ジャコバンは人間行爲の基礎となる傳統的價値と殊にカトリックの傳統を排除して、『思想の社會』を読み且つ論議せることから作り出された行爲の模範に従つて人々を行動せしめんことを求めた。人々はかく行動するを欲しないことが明白となるに及んで、彼は彼等をしてかく行動せしめんことを試み之を強要しなければならなくなつた。かくして恐嚇政治は生れた。コシヤンの獨自の意見は就中この革命的團體の發生、一七八九年以前の時期にその目的の形成されたこと、それが三部會への選舉を操縦したこと、それが政黨に發達したことなどを注意して研究したことにある。善良なブルジョア・カトリックであるコシヤンは、ジャコバン黨の『小かな町』(petite ville)を歴史的傳統に根を生やせるカルトリークのフランスである『大都市』(grande ville)と對照した。彼は『大都市』が一七八九年に幾分秩序を整してゐ

たこと、舊制度が發展し行く社會に調和しなかつたことを認めた。けれども彼は革命は根底に於て『小かな町』の『大都市』への勝利、頑固横着な少數者の組織の貧弱な政治的に無邪氣な多數に對する勝利であることを、隨つて恐嚇政治は單なる國防政府ではなく、ギリシャ流の民衆的『僭主政治』でもなく、ジャコバン黨の近代政治的な徹底的政治に知らず識らず囚へられた感受性の人々に對する狂熱者の規律ある團體の計畫的必然的暴政であつたと主張した。恐嚇政治は偶發的なものではなく計畫されたものであつた。

コシヤンはテーヌよりも舊制度が不利なものでないことを明瞭に認めた。しかし革命反對の史家にとりては、革命は惡であつたのみならず、不必要であつたことを發見すべき次の段階が殘つてゐた。この段階は一九二一八年 Pierre Gaxotte 出立みて最も顯著にとられた。氏の『アランズ革命』(Révolution française)は大戰後の不滿なフランスで素晴じく賣行を見た。氏は革命その者については、テーヌとコシヤンの『意圖説』を受容して、之に最新流行の歴史的政治的な粉飾を加へてゐる。彼は非常な聰明さを以てマチヨスの忍耐強き研究を利用して之を共和黨に仕向けて

のである。この『意圖』は『哲學者』の著作に動かされたのみならずプロレタリヤの共産主義的野心によつて動かされた。善意のブルジョア急進黨は一七九三年にも一九二四年と同様に『左翼に敵なし』といふ危険なスローガンを受容した。フランスは最高價格や風月の諸法令や^{ノガチ}旬日^{ノガチ}の禮拜などの共産主義的諸經驗に引き入れられた。この經驗はもちらん失敗であつた。今日も同様の經驗に對して十分な警告であらねばならぬ。彼の革命に關する記事は明晰で活氣あるも餘り獨創的なものではない。彼は明かに研究的史家ではなく大衆作家である。彼の舊制度辯明は一層新しい。舊制度が實は可なり善い社會であつたといふことは、長いこと王黨の明白な信條であつた。この説は近頃ファンク・ブランクの『舊制度』(Ancien régime) の中に、正しく學問的な姿容を與へられた。Gaxotte はルイ十六世の政府に殆んど無疵な健康票を與へた。第十八世紀のフランスは經濟的に榮えた成金であつた。舊制下に標準のなかつたことが健全な地方的獨立を保證し、中央集權的な近代制度下に於けるよりも個人を遙かに自由ならしめた。所謂惡弊は更に研究を進むるに於ては、概して革命家が自己辯護のた

めに發明した神話であることが分る。封建的課稅は頗る輕りも確かに重くない。有名な逮捕狀は殆んど全部が上流階級の家憲を強要するための手段として行使されたものである。思想の檢閱は開明政治の異常な出現を確かに妨げはしなかつた。更に舊制度は餘りに呑氣過ぎ、その敵者に對し餘りに寛大であつた。革命は、壓迫された多數が堪へ難い不幸に對する反亂ではなく、狹隘な貪慾な嫉妬的な非キリスト教的な成上り者の小團體が、人間的なキリスト教的な又フランス的な階級政治に正しく組織せられた社會に對する悼ましい勝利であつた。

爾來約百五十年を経過してゐるのに、フランスの史家はまだ大革命の渦中に居る。又この主題の外國の史家はフランスの史家と全く同程度の激情を示すことは稀であるが一層調和的なのではない。イギリスの史家はフランス人の行為を見て聊か激動を感じたらしく、ドイツの史家はフランス的な事物を研究するときに特に人種的意識が出て来る。實に學問的には歴史は今や國際的基礎の上に置かれてゐる。しかしロシヤ人とアメリカ人は最近他の國人よりもフ

ランス革命に多くの興味を示してゐる様に思はれる。ロシヤに於てフランス革命は殊に農業史家の興味をそゝつた。彼等が注意を惹いたのは、フランスに於ける農奴制度の崩壊に、解放後のロシヤにとり教訓のあるべきことを思へるためであつた。フランスに於ける農民の所有權、僧侶及び貴族の没収地賣却の效果に關する吾人の知識はルチスキー、コヴァレフスキイ及びカレイエフの著作に負ふ所が多い。フランス革命に於けるアメリカ人の興味は常に大きかつた。たゞしパークマン、ブレスコット、モトレーワー時代の文學的史家は何人もこの主題に興味を引かなかつた。アメリカに於ける學界の職業的史家は全體として、フランスに於ける流行の學派の何れかに與みした。彼等の研究量は就中一八七〇年以後集積せられた莫大な革命の具體的知識の量を膨脹させた。アメリカの史家は豫期せられる如く、教科書の製造に多産であつて、その多くは標準の高いものであつた。又共和のアメリカに養育せられた歴史家は、期待される通り、概して一七八九年の思想に贊意を表し、恐嚇政治中に於ける思想の悪化に著しく驚愕する。王黨派即ち革命反對派の史學派はアメリカでは殆んど賛成者を有しな

い。しかるにマチエスはアメリカの青年史家の間に活潑な門下を有し、恐嚇政治の經濟的解釋は今日大西洋のアメリカ側に於て動かし難い斷案となつてゐる。

これが何處に於ても最後の断案たるべきやは疑はしい。

フランス革命のこの簡単な修史概觀からたゞ一つの確實な結論が生れる。事實についての議論の範圍は大に狹ばめられたが、解釋についての議論の範圍は、歴史著述に於ける各新様式の出づると共に擴がつた。殊に歴史がその姉妹社會科學と益々密接な關係を加ふるに従ひ擴がつたのである。フランス革命が就中熱心に研究されたのは、西洋社會の根底にその政治的倫理的イデオロギーが存してゐたからである。しかし事件の不可能な轉回でなくとも急激な轉回により、ファシズムや、共產主義や、その他一七七六年と一七八九年の思想を完全になげする社會制度が西洋世界に確立したにしても、隨つてフランス革命が活潑な政治的信仰の焦點でなくなつたにしても、なほこの主題の史家の不一致が期待せられる。ローマ帝國は今や十分遠ざかつてゐる。それでもなほ史家はその沒落の理由についての舊問題に異つた回答を與へる。同様にフランス革命も人間の愛

憎を離れたとき、史家はもうその起原の問題に關心を持たない、或は永久的な『何故か』といふ質問に對して異つた回答を與へないと想像すべき理由はないのである。

現在まで彼等の回答は、なほテームとオーラールの著述に於て最もよく象徴せられてゐる對立せる二説の中に、非常に廣く配列される。彼等は革命の勃發と經路は、テームと共に元來『哲學者』の政治的思潮の歸結であつたと説明せんとするか、或はオーラールと共に斯様な説明を社會的政治的經濟的條件に求めんとするのである。何れの説明も通常他の説明を全く排斥するものではない。確かにその必要はない。それでも論じつめれば結局、テームの學派は現實の狀態は實際はさほど悪くはなかつたといふ結論に進み、

の最も貴重な遺産となつてつゞく、兎に角革命のエッセンスであるといふ——理論的にはさほどなくとも感情的には一層愉快な——主張を取上げんとする傾向が認められるのである。

しかもなほロベスピエールよりか數千年前に住んでゐたアテネ人ほどフランス革命について賢明な記述をなしたものはない。その言ふところによれば『さうして革命は、ヘラスの諸市に幾多の恐ろしき災禍を齎した。かくの如きは是迄ありたるところ、又人間の性質が同一なる限り、將來も常にあるべきところであらう……。諸市に紛争一度び起れば、之に從ふものは革命の精神をます／＼推し進め、彼等の企畫の斬新性と彼等の復讐の凶惡性により、既往に發生したる一切の報告を凌駕するに決した。語義は事物に對して最早や同一の關係を有たず彼等の適當と解する儘にはヴォルテール、ルソー、その他革命の父祖の尊敬に養育された善良なフランス共和派の人々にとり、非常に愉快なものではない。例へばルースタン氏やガストン・マルタン氏の著作の中には、革命を『起させた』のは思想ではなく具體的な苦情であつたけれども、思想は革命から受けた我等の反對に出づるものは疑惑を以て

狂氣じみた元氣は人の本性であつた。……亂暴を愛するものは常に信賴を博し、その反對に出づるものは疑惑を以て

見られた。陰謀に成功したものは知識あるものと思はれたが、それにも優る術數の大家は之を發覺したのであつた。他面に於て最初から陰謀と沒交渉を謀れるものは黨の離反者であり、敵を恐れる卑怯者であつた。……』（ラキデ三卷八）歴史上の時は革命の病理學を大に變するものでもなく、しかも十分な豫防法を講ずるものでもない。

II 参考書 III

この書目解説の主目的はフランス革命史に關する要著の概略を示さんとするにある。舊著はなほこの領域に於ける創造的著作の重要部分を構成してゐると思はれるときのみ記載した。最近約十年間の著作は一層多く掲載した。その故は容易に手にし得る『ケンブリッヂ近世史』第八卷（一九〇四）及びその他同種の書目的記載に之を見ることが出来ないのと、時間の経過を待たなければ近著の何れの部分が永久的價値を持ち得るかを確め得なくなつた。

下記のGershom 及び Gottschalk の教科書及び C. D. Hazen, The French Revolution (New York, 1932), II, 1025-1045 まで、
及最近の著述が載つてゐる。其の題點は G. Lefebvre, R. Guyot, et P. Sagnac, La Révolution française (Paris, 1930) の各節の書目的記載が頗る有益である。以上は何れも容易に利用し得るのと、本書目は第三編『歐米に於ける革命の傳播』を除く。

フランス革命史研究者のために（附註）

決して完璧を期したものではないが、國際學會としてのカーボン主義の研究には一冊の案内書も存しないので、第三節は完全な書目でなくとも兎に角役立ち得る書目たらんことを期した。又第五節が頗る簡単であるのは、狹義に於ける思想史の参考書目は前述のルフューブル、ガロー、セニャック合著の近刊に便利な記載があり、廣義に於ける思想史のそれは頗る廣汎に亘り一冊の書物を必要とするに至るおどりである。

I-1 般史

この十年間に於けるヨーロッパよりの書類は、主として書きたゞ誘惑が強かつたが、協力的の著述のために思ひ止まつた。この場合にも自然重點はフランスの事件に置かねばならぬ。然知せられてゐる二個の協力的著述は大體の時期に遡ること数年間に亘つてゐる。やれば E. Lavisse et A. Rambaud, Histoire générale : VIII, 1789-1799 (Paris, 1906) と Cambridge Modern History : VIII, The French Revolution (New York, 1904) である。ヨーロッパの規模の權威的な著述は G. Lefebvre, R. Guyot, et P. Sagnac, Peuple et Civilisation : XIII, La Révolution française (Paris, 1930) である。Propyläen Weltgeschichte: VII, Die französische Revolution, Napoleon und die Restauration (Breslau, 1929) は立派な綱が入りてゐる。又 A. Stern による書籍の記事は着實、正確なる點ではばよろくな。

II. 教科書

教科書の大部分も亦實際は一七八九—一八一四年間のトトロ、^{トトロ}と歴史である。近著の中その規模の最も一層大きな歴史的なのはL.R.Gottschalk, *The Era of the French Revolution*(Boston, 1929)である。^{トトロ}トトロの著者たゞらの著述の範囲は廣く、^{トトロ}トトロの革命を含む多くの歴史的事件に關する事半ば革命の事件と革命に參じる事件を含むものである。H.E.Bourne, *The Revolutionary Period in Europe*(New York, 1914) はオーハークの歴史を大に蒙った優秀な著述である。H.M.Stephens, *Europe, 1789—1815* (New York, 1893) は解説として時代後れな事實を語るところである。

III. 文 献

H.von Sybel, *Geschichte der Revolutionszeit*, Rev. ed., 10 vols. (Stuttgart, 1897—1900) English trans. 4 vols. (London, 1867—1879); A.Sorel, *L'Europe et la Révolution française*, 8 vols. (Paris, 1895—1904) の大作は、トトロの革命のと並べて、國際關係に及ぼす影響を研究してゐる。兩著何れも大袈裟な外交史であり、外交折衝の單なる歴史ではなく、トトロの革命はトランヌ人に對し激しい偏見を持つてゐるところである。彼の基礎的著作がなければ、ハナルの書は著述することができなかつたのである。ハナル自身は紳士で、ハランヌ人で、第十九世紀末期の教育ある種健論者であった。革命は彼に激動を與へたことは確かであるが、彼は全くその大原則を攻撃するほどには思はない。彼は全くその大原則を攻撃するほどには思はない。ハナルの結論を修正した多くの學問的研究の中最も顯著なのはR.

Guyot, *Le directoire et la paix de l'Europe*(Paris, 1911) である。Reubell (トトロのトトロの外交政策を頗る有利なる光明論者) である。近著の數多き單行本の中注目すべきものは次の諸著である。J.H.Clapham, *The Causes of the War of 1792* (London, 1899); G.Michon, "Robespierre et la Guerre," *Annales révolutionnaires* 1920, XII, 265—311; E.D.Adams, *The Influence of Grenville on Pitt's Foreign Policy*(Washington, 1904); C.Ballot, *Les Négociations de Lille*(Paris, 1910); K.Heidrich, *Preussen im Kampfe gegen die französische Revolution* (Stuttgart, 1908); P.Gaffarel, *Bonaparte et les républiques italiennes, 1796—1799* (Paris, 1895); E.Driault, *Napoléon en Italie*(Paris, 1906)(諸著のトトロの著述を補うる); E.W.Lyon, *Louisiana in French Diplomacy, 1759—1804* (Norman, Okla., 1934); D.Gerhard, *England und der Aufstieg Russlands* (München, 1933). トトロの革命とモーリスの情勢を此處に詳述する。A.Wahl, *Geschichte des europäischen Staatensystems, 1789—1815* (München, 1912) である。本文の經濟的方法の著述を補うる。E.J.Heckscher, *The Continental System* (Oxford, 1922) の著述を補うる。

諸著の著述を補うる。Cambridge History of British Foreign Policy, 3 vols. の中、第一卷は英人の單純にして古風な歴史的記述である。H.Oncken, *Die historische Rheinpolitik der Franzosen* (Gotha, 1922) は母國とその連邦主義との類

ふと歴史の時代がわざわざ、この問題の近代的理屈が必要である。

外國圖書は第四節に掲げた書中にも取扱はれること。

II ハンバニ於ける革命

I. 書中材料及び其の資料

大學卒業程度で著述を希望する研究者にハナト最もへて器であるべき書は P. Caron, Manuel pratique pour l'étude de la Révolution française (Paris, 1912) やおひて、史料参考書は B. F. Hyslop, Répertoire critique des cahiers de doléances pour les Etats généraux de 1789 (Paris, 1932) やおひて、現存資料の一例の断片を採録し得るべくハレ。重版なる新刊特殊書は B. F. Hyslop, Répertoire critique des cahiers de doléances pour les Etats généraux de 1789 (Paris, 1932) やおひて、現存資料の一例の断片を採録し得るべくハレ。現存資料の一例の断片を採録し得るべくハレ。全く人間的な諦を持てば不思議な人種といふハナト等者からの嘲笑を與ぐるが、有様な入門書やある。ハマカの大図書館で容易に利用し得る即行資料は豊富なる。議事録が見ゆる Reimpresion de l'ancien Moniteur, 31 vols. (Paris, 1843—1845); Archives parlementaires, ed. J. Mavidal E. Laurent etc., Series I, 1787—1799, 82 vols. (Paris, 1879—1913) 論議の叢書(見るの難易とは程遠いが)はハチドリの記録を集録したものが多いため、紙代の多く 1 千円前後 1 円半程度である。P. B. Buchez et P. C. Roux, Histoire parlementaire, 40 vols. (Paris, 1834—1838) が便利な叢書やある。該注釋器の作用は A. Aulard, Recueil des actes du comité de

salut public, 26 vols. (Paris, 1889—1920); A. Debidour, Recueil des actes du directoire exécutif, 4 vols. (Paris, 1910—1917); Les actes du gouvernement révolutionnaire, 22 août 1793—27 juillet 1794. (Paris, 1920); P. Mantouche, Le gouvernement révolutionnaire, 10 août 1792—4 brumaire an IV (Paris, 1912) が適当な本である。第戎監獄の歴史 A. Cochin et C. Charpentier, Commune de Paris pendant la Révolution, 2 series, 16 vols. (1894—1914) が証明する如く、1 千円前後 1 千円の値段で出でる。政治の實録の叢書は A. Aulard, La société des Jacobins, 6 vols. (Paris, 1889—1897) が最も有名である。ハマカの記録は C. Brinton, The Jacobins (New York, 1930); A. Chalmel, Les clubs contre révolutionnaires (Paris, 1895) の如きである。議事録は編成された大手の Collection de documents inédits sur l'histoire économique de la Révolution française である。既に紹介した如きの「大革命」の各卷の實録、該實録、實録実録、實録実録、實録実録の如き W. A. Schmidt, Tableaux de la Révolution française, 3 vols. (Leipzig, 1867—1871); P. Caron, Paris pendant la guerre, 2 vols. (Paris, 1910—1914); A. Aulard, Paris pendant la réaction thermidorienne et sous le directoire, 5 vols.

(Paris, 1898—1902); L. G. W. Legg, *Select documents illustrating the History of the French Revolution*, 2 vols. (Oxford, 1905) 等。述論は概要的であるが、革命の歴史 *Annals historiques de la Révolution française* が最も詳しい。

III. 文獻

- F. Mignet, *Histoire de la Révolution française* (Paris, 1824); English trans. (London, 1913) は、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである。L. A. Thiers, *Histoire de la Révolution française*, 10 vols. (Paris, 1824—1827); English trans. 5 vols. (London, 1895) は、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである。T. Carlyle, *The French Revolution*, ed. by C. R. L. Fleisher, 3 vols. (New York, 1912) は、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである。J. Michelet, *Histoire de la Révolution française*, rev. ed., 9 vols. (Paris, 1883—1887) は、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである。L. Blanc, *Histoire de la Révolution*, 12 vols. (Paris, 1847—1862) は、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである。H. A. Taine, *Les origines de la France contemporaine*, rev. ed., 12 vols. (Paris, 1899—1914) (同書第2巻が、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである) (J. J. は、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである) A. Aulard, *Histoire politique de la Révolution française, origines et développement de la Démocratie et de la République* (1789—1804) (Paris, 1901); English trans. 4 vols. (New York, 1910); J. Jaurès, *Histoire socialiste de la Révolution française*, ed. A. Mathiez, 8 vols. (Paris, 1922—1924) (同書第2巻が、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである); Lord Acton, *Lectures on the French Revolution*, new ed. (London, 1925) は、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである。A. Mathiez, *La Révolution française*, 3 vols. Coll. A. Colin (Paris, 1922—27); English trans. 2 vols. (New York, 1928—31); A. Cochin, *Les sociétés de pensée et la démocratie* (Paris, 1920); P. Gaxotte, *Révolution française*; English trans. (New York, 1932); C. D. Hazen, *The French Revolution*, 2 vols. (New York, 1932) は、革命の歴史を記述するもので、その中で、革命の本質的な記述や、歴史の論述など、必ずしも革命の歴史そのものである。

ノ。水の川聲は豊かな眞理足らず難かねたる辯論を極めた。

P. Kropotkin, *The Great French Revolution*, English trans.

(London, 1909) (編譯あり改造文庫に收む) ローヤ無政府主義者
の著述。大革命の事變を説へる時の巧妙な鮮明な文章のため
て大興味を以つた書。他書では現られたばく悲感的な社會思想
が理解する爲めの材料を收む。N. Webster, *The French Revolu-
tion* (London, 1919) 大マーチー主義の歴史の極端な例。余揮金
をば、比較的少數の惡黨共、品わカルナント黨や共濟組合員等『ヘ
ル・カル』社員や『哲學家』等の間に重複する組織と併わる所
を記す。

III 教科書

教科書等の参考書等の如き L. Gershoy, *The French Re-
volution and Napoleon* (New York, 1933). 岩波文庫等を十数本
購入し記述略述する。L. Madelin, *La Révolution* (Histoire de
France racontée à tous) (Paris, 1916) これが教科書として使
用されたものである。題の纏縛は富ふ超文學的でトボンナム様の
筆風である。隸して政治的實業的知識等此書は E.
D. Bradby, *The French Revolution* (Oxford, 1926) 及び S.
Matthews, *The French Revolution*, rev. ed. (New York, 1923)
等である。大學卒業程度の人文科学の懸念書本は E. Lavisse,
ed., *Histoire de France contemporaine* : I. *La Révolution*,
1789—1792, par P. Sagnac ; II. *La Révolution*, 1792—1799,
par G. Pariset (Paris, 1921) がある。

IV 教科書

G. Salvemini, *La rivoluzione francese*, 1788—1792, 5th. ed.
(Florence, 1925) 世情社會組織全般に亘るの業績を略述する
もの。A. Cochin, *Les sociétés de pensée en Bretagne, 1788—
1789, 2 vols.* (Paris, 1926). 本邦の諸事变の歴史的背景を述べ
る。前半は既に述べた如くの推移を研究した頗る重要な
書である。洋金に對し明確に敵意を抱いた者によつて記され
たものである。G. Martin, *La francmâconnerie française et
la préparation de la Révolution*, 2e éd. (Paris, 1926). 異教
難問題を専らに以て取扱つてゐる。H. Hinze, *Staatsinheit
und Föderalismus im alten Frankreich und in der Revolution*
(Stuttgart, 1928) が最もい。洋金の中心問題の一般政治思想並に
政治機關の見地から取扱はれてゐる。トマソ・カーマル以降ニマハ
人による本問題の歴史に及ぶられた最も重要な結果である。

G. Lefebvre, *La grande peur de 1789* (Paris, 1932) せ、1921の母國の革命は本筋取扱ひ難いへて、翻訳もしないが、本筋を充てしめ

1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

S. Herbert, *The Fall of Feudalism in France* (London, 1921) の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

La législation civile de la Révolution française (Paris, 1898) の本筋を充てしめ

1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

J. Arnaud-Bouteloup, *Le rôle politique de Marie Antoinette* (Paris, 1924) せ、J. M. Thompson, "The Fersen Papers and their Editors," *English Historical Review* (1932),

XLVII, 73. 1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

inédite, ed. by H. Carré (Paris, 1932) せ、1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

C. Du Bus, *Stamidas de Clermont-Tonnerre et l'échec de la Révolution monarchique* (Paris, 1931) せ、1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

L. B. Pfeiffer, *The Uprising of June 20, 1792* (Lincoln, Neb., 1913) せ、1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

A. Mathiez, *Le dix août* (Paris, 1931) せ、1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

F. Braesch, *La Commune du dix-aôut* (Paris, 1911) せ、1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

G. Walter, *Les massacres de septembre* (Paris,

1932) せ、1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

I. Mortimer-Ternaux, *Histoire de la terreur*, 8 vols. (Paris, 1863—81) せ、1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

1921の母國の革命が最も多く、本筋を充てしめ

最近の歴史的な著述でG. Belloni, *Le comité de sûreté générale de la Convention* (Paris, 1924) あるいは、A. Ording, *Le bureau de police du comité de salut public* (Oslo, 1930) あるはその如きの如く、アーモンドの著述を参考して、A. Meynier が最近刊行された著述である。A. Meynier は、A. Ording の著述を参考して、C. Richard, *Le comité de salut public et le fabrications de guerre* (Paris, 1921); P. Robin, *Le séquestre des biens ennemis sous la Révolution* (Paris, 1929); G. Lenôtre, *The Guillotine and its Servants*, English trans. (London, 1927) 『大革命』の如きに大きな影響を与えた保守主義者たちの著述である。アーモンドの仕務記録によれば、近頃L. de Cardenal, *La province pendant la Révolution*; *histoire des clubs jacobins* (Paris, 1929) また C. Brinton, *The Jacobins* (New York, 1930) や A. Meynier が著述した偉大な『二』は L. Barthou, *Le neuf thermidor* (Paris, 1926) と同様の物語である。

次の用年記に於ける政治組織団体は、G. Javogues, "L'affaires du camp de Grenelle," *Annales historiques de la Révolution française* (1925), II, 23; E. B. Bax, *The Last Episode of the French Revolution* (London, 1911) (この記載に於ける最も上のトマス・エリザベスを取つて以来、トマス・エリザベスの健康な研究) による A. Meynier が最近刊行された著述的要諦である。Les coups d'état du Directoire, 3 vols.,

「革命貴族」がトナリ及ぶ回顧の運動に繋がる多々の文藝書
心を擧げよ。かたゞ、探求の著作を織成し後半精良を極むる次の諸書
のふやく。I. Dubreuil, Histoire des insurrections de l'Ouest,
2 vols. (Paris, 1924—25) 異語本や『政治』論考の「革命貴族」
の題の名前なる書(ふたゝかく一と題し書も見事な記述は今だ世に
Pierre de la Gorce のタムラクの Histoire religieuse de la
Révolution の如き現出する)。C. Le Goffic, La Chouannerie
(Paris, 1930) は軍事的方面に於て書と武好や、余は題と所へて
E. Gabory, L'Angleterre et la Vendée, 2 vols. (Paris,
1930—31) 他へ總合して、若く L. Madelin の如き貴族の反撃
の歴史ハシマリテ、貴族の反撃ハシマリテ、貴族の反撃ハ
シマリテ。E. Vingtrinier, Histoire de la contre-révolution,
2 vols. (Paris, 1924—25). 久の輪は F. Baldensperger, Le mou-
vement des idées dans l'émigration française, 2 vols. (Paris,
1925) と共に、『革命貴族』の革命貴族の歴史である。E.
Daudet の著述を處して。O.

十九年の状態に繋がり。A. Vandal, L'avènement de
Bonaparte (Paris, 1903), I は卷を長くは區ださ。
O 盛期の歴史記述 M. Deslandres, Histoire constitutionnelle
de la France de 1789 à 1815, 2 vols. (Paris, 1932) が最も深く
その表題を裏切る豊かな廣汎な仕方に於て織成された。革命の他
の方面も一緒に想うべきである。

ルルルクの歴史書は必ずしも評論的書かれてゐるが、その筆調は必ずしも歴史的である。J. Saintoyant, *La colonisation française pendant la Révolution, 2 vols.* (Paris, 1930) は最も興味ある。英國の歴史書はSt. Domingue (Hamburg, 1930) 及び C. L. Lekke, *France and the Colonial Question, 1763—1801* (New York, 1932) の如きに長く記述される。

K. 基教史

ルルルクの大著は P. de la Gorce, *Histoire religieuse de la Révolution française, 5 vols.* (Paris, 1909—23) である。R. Le Gall, *教会の歴史の研究* (1922) は、歴史的記述の如きを多く含んでゐる。L. Sciout, *Le clergé de France pendant la Révolution, 2 vols.* (Paris, 1912—27) もカトリック教徒の精神史を主として記述する。ルルルクは青年時代の宗教史家であるが、ルルク La théophilanthropie et le culte décadade (Paris, 1904) 及び Rome et le clergé français sous la constituant (Paris, 1911) は彼の宗教史の取扱いを示すものである。映画は反革命的基調の如きの如き題材の如きを有力な対象とする。Aulard, *Christianity and the French Revolution, English trans.* (London, 1927) はやや小説的であるが、その構成は必ずしも評論的である。小説文なるも興味あるが、G. Rouanet, "La religiosité

des Girondins," *Annales historiques de la Révolution française* (1928), V, 97. ルルク。神官係の歴史的考察は P. Feenstra, *De Godsdienst en de Fransche Revolutie* (Haarlem, 1929) が最も興味ある。

L. 戰争史

ルルルクは必ずしも歴史の書かれた戦争の歴史であるが、英雄崇拜、敵國の歴史及び將來秩序を圖るに於て軍事思想が充ちる。A. Chauvet, *Les guerres de la Révolution, 11 vols.*

(Paris, 1886—96) は長い範囲を亘るが、ルルク La première invasion prussienne, Valmy. などは別題を除して La première 本著は無概要で、歴史と地理学と技術的知識を兼ねてゐる。今だへども英文化最も多く利用されたのは R. W. Phipps, *The Armies of the First French Republic, 3 vols.* (Oxford, 1926—29) である。更に詳しく述べる。ルルクの軍事史の研究は、S. Wilkinson, *The French Army before Napoleon* (Oxford, 1915); The Rise of General Bonaparte (Oxford, 1930). ルルクの諸の軍事的問題は、J. W. Fortescue, History of the British Army, IV, 1789—1801, 2 parts (London, 1906) 及び Krieg gegen die Französische Revolution, 1792—1797, 2 vols. (Vienna, 1905) である。多數のトーネー等の軍事家が書かれ、軍事史の特殊方面に關する論議は G. Michon,

La justice militaire sous la Révolution (Paris, 1922). 海軍史と
聖ヨハネ A. J. Mahan, Influence of Sea Power upon the
French Revolution and Empire, 1793—1812, 10 th. ed. (New
York, 1898) は最も著しく。

八、用ひし通商及び經濟を取扱ふる書籍

堅密な通商史は殆んむなし。F. L. Nussbaum, Commercial
policy in the French Revolution, a Study of the Career of G.
J. A. Ducher (Washington, 1923) せゆる論述の筆者たるの如く。
G. Lefebvre, "Le commerce extérieur en l'an II," Révolution
française (1925), LXXXVII, 133 and following ; E. Pollio,
"Le commerce maritime pendant la Révolution," Révolution
française (1931), LXXXIV, 289 and following ; C. Poisson,
Les fournisseurs aux armées sous la Révolution (Paris, 1932).
Annales révolutionnaires 及むるの裏ア Annals historiques de
la Révolution française その他の多くの論文の多くは實業方面を
取扱ふもの。

金融の歴史の著書は多いが、その代表的書物 M.
Marion, Histoire financière de la France depuis 1715, 5 vols.
(Paris, 1914—32) がその総括的である。しかし著者が貨幣理論家
である。本書は權威的著述であるが、しかし著者が貨幣理論家
として特徴的な心象をもつて猛烈な利子生活者の偏見を有して
いるのが遺憾である。S. E. Harris, The Assignats (Cambridge,

Mass., 1930) の持述な新潮は、この時期に對し研究者の望み得る
一書である。

經濟史の中生産懸念、鹽稅、關稅等の部分は多數あるが、H.
K. の著書をだす。La vie chère et le mouvement sociale sous
la terreur (Paris, 1927) がその最もよく表わされたもの。H.
K. の史家として如何好んで持たれなくはない。本問題に關
する點最もその編者 A. Cochin, "Sur la politique économique
du gouvernement révolutionnaire," Revue des questions hist
oriques (1933), CXVIII, 267. G. Pariset, Études d'histoire
révolutionnaire (Paris, 1929) は大部分經濟的の貴重な資料であ
る。彼の著書では省略されることが多いので省略する。被服や
食糧等の需要 (特に被服など) は多く被服 E. Levasseur, Histoire des
classes ouvrières et de l'industrie en France depuis 1789, 2 vols.
(Paris, 1903) がその裏ア 被服の需要は被服の需要である。
但し L. Lallemand, La Révolution et les patvres (Paris, 1928)
は被服の書物である。

都市のトロニカルヤード M. G. Jaffe, Le mouvement
ouvrier à Paris pendant la Révolution (Paris, 1924) がその
總括的議論をしておる。A. Mathiez, "La Révolution et
les prolétaires," Annales historiques de la Révolution française
(1931), VIII, 479 がその問題を闡明する彼の最後の断案である。

J. de la Monneraye, *La crise du logement à Paris pendant la Révolution* (Paris, 1928); E. Soreau, "Les ouvriers en l'an VII," *Annales historiques de la Révolution française* (1931), VIII, 117.

農業問題の研究に當ねるに世界の最も有名な史家は、現在ベルトラン大尉の G. Lefebvre である。此の朝々たる専門書 *Les paysans du Nord pendant la Révolution* (Lille, 1924) は「農業者と地主が如何なる抗争を行つてゐるか」、後來の著者と標榜を取つてゐる。此の著者 Questions agraires au temps de la terreur (Strasbourg, 1932) が何處かで文書集である、「有能なる考證的詳細な註」の一連の本から有名な風呂の諸法令を明記してゐる。ハーレーの水の「論文は我等の知識の立派な要綱である。」*"Recherches relatives à la vente des biens nationaux," Revue d'histoire moderne* (1928), III, 188, 及び "La place de la Révolution dans l'histoire agraire de la France," *Annales d'histoire économique et sociale* (1929), I, 506. また E. Soreau の *La Révolution française et le prolétariat rural*, *Annales historiques de la Révolution française* (1932), IX, 28 and following. など。

左の著者 H. J. Laski, "The Socialist Tradition in the French Revolution," in his volume of Studies in Law and Politics (London, 1932), 及も W. B. Kerr, "Le parti modéré et le conflit des classes à la Convention,"

Annales historiques de la Révolution française (1932), IX, 412 附近。

六・社會主義

社會主義者として有名な者を挙げておきたい。兄妹の著者 E. et J. Goncourt, *Histoire de la société française pendant la Révolution*; *Histoire de la société française pendant le Directoire*, 3e éd. (Paris, 1864) は「革命中の大革命家たちの之類を記す。」水の著者は最大の興味を有する。J. Tiersot, *Les fêtes et les chants de la Révolution française* (Paris, 1908); M. Dommanget, *Le symbolisme et le prosélytisme révolutionnaires à Beauvais et dans l'Oise* (Beauvais, 1931) は「革命の樂趣并の「歌謡を廣況の使用」による「地方史」である。G. G. Andrews, "Making the Revolutionary Calendar," *American Historical Review* (1931), XXXVI, 515 (参考: *革命の年表*); P. Mantouche, "La vie à Paris sous la Terreur," *Revolution française* (1930), LXXXIII, 203 et seq.; G. Lefebvre, "Foules révolutionnaires," *Annales historique de la Révolution française* (1934), XI, 1, 4-5 世紀の革命の「歌謡」の概要を記す。左の著者 H. J. Laski, "The Socialist Tradition in the French Revolution," in his volume of Studies in Law and Politics (London, 1932), 及も L. Madelin, *La France du Directoire* (Paris, 1933) 及び M. Minigerode, *The Magnificent Comedy* (New York, 1931) など。左の著者は「革命の年表」である。

や體和と「世期の外面的事實の想像的な印象を刻み込む」かむる
ものゝは無しでは、最も良の1書アナトール・ラサルの忠實な
革命物語 *Les dieux ont soif* (諸版あり) 矣。

10. 傳記

傳記の數は夥だしくある。ノーベル賞のみを獲鐵か。卅八
の大人物に關係する諸著は次の如くである。J. Ehrenbourg,
La Vie de Gracchus Babeuf (Paris, 1929); E. D. Bradley,
Life of Barnave, 2 vols. (Oxford, 1915) 異端のトロツキズム
傳記 *E. Elery, Brissot de Warville* (Boston, 1905)
最上の傳記 *H. Delsaux, Condorcet journaliste* (Paris, 1931) は忠實な革命家ハシタヤーを取扱つた良
書。H. Wendel, *Danton* (Berlin, 1930) は幾分非常な色彩を加へ
てゐる。ハシタヤー大抵の々々への傳記作者は修辭に誇ほれ勝つ
る。L. Barthou, *Danton* (Paris, 1932) せんの大政治家を賞讃
する。本著がゐたるやうに、ハシタヤーの努力が一部徒勞であつたとい
ふ點實に詮証してゐる。ナントカ此處の著述は廣汎に亘つて、
大敵意を抱つた著述は廣汎に亘つて、*Danton et la paix*
(Paris, 1919) 及び *Autour de Danton* (Paris, 1926) せん
異本といつて差し合ひやがへ。ハシタヤーの忠實な傳記はだせ H.
Belloc, *Danton* New York, 1899 である。R. Arnaud, *La vie
turbulente de Camille Desmoulins* (Paris, 1928) は、金へ苦難
やせたらば、J. Claretie, *Camille Desmoulins* (Paris, 1875) の特
殊なハシタヤー感傷主義的近代の讀者を惹起させつた。*G.*

Girard, *Vie de Lazare Hoche* (Paris, 1926) は他の「小説的な
傳記」である。精神を主張した點で、英國ではまだやあ。
H. R. Sedgwick, *La Fayette* (Indianapolis, 1928) は、ハシタ
ヤーはその適當な傳記せなく、好んで歴史家 S. W. Jackson,
Lafayette, a biography (New York, 1930) を選ぶべきである。
本著は彼を導いて且て資本の闇を照らすものである。L. Jacob,
J. Le Bon (Paris, 1933); L. R. Gottschalk, *Jean Paul Marat*
(New York, 1927) はハシタヤー革命のU.S.O. 主題の「米人の
オーバードラム」である。眞面目な傳記の「ハシタヤー」
の説明である。ハシタヤーは諸著者より見れば、前著より思はれる。
G. Walter, *Marat* (Paris, 1933); H. Belloc, *Marie Antoinette*
2 ed. (New York, 1924) は、ヨーロッパの政治的社會論の様
貌を比較的細緻に示すハシタヤー革命の諸題材を全力を盡して
いる。彼の大才せ十分に發揮するに至つた。L. de Lamotte 父子の
Les Mirabeau 5 vols. (Paris, 1879-91) は忠實な取扱はれる。
L. Barthou, *Mirabeau* (Paris, 1914) は羅政治家、の著者である。
D. Walter, *Gouverneur Morris, témoin de deux révolutions*
(Lausanne, 1932) English trans. (New York, 1934) 是初期史論
の著者である。E. Hamel, *Histoire de Robespierre*, 3 vols.
(Paris, 1865-67) 異端な時代のハシタヤーの大義健民
を有して底に餘り正確でないが、心地よい唯一の詳細な傳記
である。ナントカローラマーレの傳記をかき得なんだが、彼
の本著の人の樂趣がある。H. Béraud, *Mon ami Robespierre*.

erre (Paris, 1927) せ世をひそむ疎遠じやの所謂『新』傳記編修者を用ひたる表題が無理であるに拘らず、好印象を残すものである。

ルセダムロー出版ローブンヌーは英豪たらしめでる。ルイ・ル・ブルの小アルカート聖職を中心の理解し得るのみでない。ルイ・ル・ブル H. Belloc, Robespierre, new ed. (New York, 1927) せの領域に於ける最も著であつて、ローブンヌーを血に飢えた羅漢とも賢明な政治家とみしならし、誠に哀れな術學者にしてゐる。 Clémenceau-Jacquement, Vie de Mme. Roland, 2 vols. (Paris, 1929) は相當な出来事である。ルイ・ル・ブルの弟へくる第1回方を弟へ語る。J. H. Clapham, The Abbé Sieyès (London, 1912); G. G. Van Deusen, Sieyès: His nationalism (New York, 1932); G. Lacour-Gayet, Talleyrand, 1754—1799 (Paris, 1928) せのへるの主題はドゥーランダム、ルイ・ル・ブルの實業家としての歴史である。L. Lentilhac, Vergniaud (Paris, 1920). ルイ・ル・ブルは實に有能で興味ある。少しここからルイ・ル・ブル近世史第八卷に掲載ある書目で十分である。

III 歐米に於ける革命の傳播

次の書目は批評よりも使用價值によつた。殊に全體としての主題は比較的研究が積まれてゐなくなつてゐる。故に批評は最少で、論述に出でてゐる。カーテン及びソンの著述の多くは、次回の

『國政』の項に取扱ふる難點の一部を詳述する所を省略する。

1. 捷報 蘭國

P. Verhaegen, La Belgique sous la domination française, 2 vols. (Brussels, 1923—24) は金の眞理と眞諦とする。運の壯密。 S. Tassier, Les démocrates belges de 1789 (Brussels, 1930) はベルギー族(Vonckists)の民族的本性である。ルイ・ル・ブルの歴史 de la Belgique sous l'occupation française en 1792 et 1793 (Brussels, 1934); F. van Kalken, "Les origines du sentiment anti-révolutionnaire dans les Pays-Bas autrichiens en 1789," Revue d'histoire moderne (1927), II, 161; C. Pergameni, "Les fêtes révolutionnaires et l'esprit public bruxellois au début du régime français," Annales de la Société archéologique de Bruxelles (1913), XXVII, 5; T. K. Gorman, America and Belgium (New York, 1925) は 1789—1790 年—1791 年の國立メーリーの皮肉が如きの筆記である。

L. Legrand, La Révolution française en Hollande (Paris, 1895); H. T. Colenbrander, De Batavaïsche Republiek (Amsterdam, 1908) が麗な筆入で手どり。

H. Büchi, Vorgeschichte der Helvetischen Revolution, I, 1789—1798 (Solothurn, 1925); A. Stern, "Der Club der schweizer Patrioten im Paris, 1790—1791," Abhandlungen und Aktenstücke zur Geschichte der Schweiz (Aarau, 1926); A. Rufer, J. von Müller's Bericht über seine Mission nach der

Schweiz im Jahre 1797 (Berne, 1933); J. L. Rieser, Les relations franco-helvetiques sous la Convention (Dijon, 1927); A. Rufer, Pestalozzi, die französische Revolution und die Helvetik (Berne, 1929).

K. Bockenheimer, Die Mainzer Klubisten (Mainz, 1896); Mainzer Kurfürsten F. K. von Erthal, 1789—1792 (Dillingen, 1932); P. Sagnac, Le Rhin française pendant le Révolution et l'Empire (Paris, 1917); A. Rambaud, Les française sur le Rhin, 1792—1804, 2e éd. (Paris, 1888).

11. 大 拼 國

W. T. Laprade, England and the French Revolution (Baltimore, 1909); ウ・T・ラプラード著の「大英の反法革命」; W. P. Hall, British Radicalism, 1791—1797 (London, 1912); P. A. Brown, The French Revolution in England (London, 1918); R. Birley, The English Jacobins (Oxford, 1924); ジ・G・アルジャー著の「大英のジャコビアン」; J. G. Alger, Englishmen in the French Revolution, 2 vols. (London, 1889); ジ・G・アルジャー著の「大英のフランス革命」; V. C. Miller, Joel Barlow, revolutionist (Hamburg, 1932); ジ・C・ミラー著の「大英の革命家ジョエル・バルロー」; C. Maxwell, The English Traveller in France, 1698—1815 (London, 1932); ジ・C・マクスウェル著の「大英の旅人」; P. W. Pullister, The Irish Rebellion of 1798 (London, 1898); R. Hayes, Ireland and Irishmen in the French Revolution (London, 1932); H. W. Melville, Scotland and the French Revolution (Glasgow, 1912).

III. ド ラ ハ 蘭國

W. Wenck, Deutschland vor hundert Jahren, 2 vols. (Leipzig, 1887—1890); ジ・W・エンク著の「百年の歴史」; G. P. Gooch, Germany and the French Revolution (London, 1920); ジ・P・グー奇著の「ドイツとフランス革命」; A. Stern, Der Einfluss der französischen Revolution auf das deutsche Geistesleben (Stuttgart, 1927); ジ・アーネスト著の「フランス革命によるドイツ精神の影響」; J. Dresch, "Die Allemagne et la Révolution française," "Vie des peuples (1920), II, 235. ジ・ドレッシュ著の「フランス革命によるドイツ精神」; K. Lessing, Rehberg und die französische Revolution (Freiburg i. B., 1910); H. Ullmann, "Die Anklage des Jacobinismus in Preussen im Jahre 1815," Historische Zeitschrift (1905), XCIV, 435; E. Saur, Die französische Revolution von 1789 in zeitgenössischen deutschen Flugschriften und Dichtungen (Weimar, 1913); K. Kersten, Ein europäischer Revolutionär, Georg Förster (Berlin, 1921); M. Lehmann, "Die preussische Reform von 1808 und die französische Revolution," Preussische Jahrbücher (1908), CXXXII, 211; H. Marczali, "Die Verschwörung Martinovics," Ungarische Revue (1881), I, ii; E. Malyusz, Sándor Lipót főhercég nádor iratai (The writings of the Palatine

Archduke Alexander Leopold) (Budapest, 1926) 大革命の後、アーチデューク・レオポルトの本著。ノルマニーリーの歴史の歴史書の本著がなされてゐる。J. Jaurès, Histoire Socialiste de la Révolution de 1789 の傳記と評議書がある。

P. Gaffarel, Bonaparte et les républiques italiennes, 1799—1800 (Paris, 1895); A. Pingaud, La domination française dans l'Italie du Nord 1796—1805, 2 vols. (Paris, 1914); P. Hazard, La Révolution française et les lettres italiennes (Paris, 1910) 著者名は記入されない。C. Lombroso etc., La vita italiana durante la Rivoluzione francese, 6th. ed. (Milan, 1915); A. Ferrari, L'esplosione rivoluzionaria del Risorgimento italiano, 1789—1815 (Milan, 1925); G. Lombroso, I moti popolari contro i francesi alla fine del secolo XVIII (Florence, 1932); G. Sforza, Idee e formazioni politiche in Lombardia, 1748—1814 (Pavia, 1927); A. Luzio, Francesi e giacobini a Mantova (Mantua, 1890); L. Rava, La Romagna nel 1798 (Modena, 1933); E. A. Brigi, Giacobini e realisti o il vita Maria (Siena, 1882); A. Pivano, Albori costituzionali d'Italia (Turin, 1913); F. Masson, Les députés de la Révolution : Hugou de Basville à Rome (Paris, 1882); A. Dufourcq, Le régime jacobin en Italie. Étude sur

la république romaine (Paris, 1900); B. Croce, La rivoluzione napoletana dal 1799, 4th. ed. rev. (Bari, 1925) 著者名は記入されない。A. Simioni, Le origini del risorgimento politico dell'Italia meridionale, 2 vols. (Messina, 1925—29); L. Scandone, "Il giacobinismo in Sicilia," Archivio storico siciliano (1921), XLII, 279 and following.

四、イタリアの革命

A. Tratchevsky, "L'Espagne à l'époque de la Révolution française," Revue historique (1886), XXXI, 1; G. de Grandmaison, L'ambassade française en Espagne pendant la Révolution (Paris, 1892); A. Söderhjelm, Sverige och den Franska Revolution, 2 vols. (Stockholm, 1920; Helsingfors, 1924) ノルマニーリーの歴史書の伝記がある。R. Périer, Gustave IV Adolphe et la Révolution française (Paris, 1914), 大革命の歴史。C. de Larivière, Catherine II et la Révolution française (Paris, 1895).

五、フランスの革命

C. D. Hazen, American Opinion of the French Revolution (Baltimore, 1897); D. Malone, The Public Life of Thomas Cooper (New Haven, 1926) 著者名は記入されない。C. Warren, Jacobin and Junto (Cambridge, Mass., 1931) ノルマニーリーの歴史。M. Minnigerode,

Jefferson, Friend of France, The Career of C. C. Genêt (New York, 1928) 本編の序文で、アーヴィングの著書を以て終る。又
布羅ード等の G. Chinard, Jefferson et les Idéologues (Baltimore, 1925); B. Fajf, L'esprit révolutionnaire en France et aux Etats-Unis à la fin du 18 me siècle (Paris, 1925). 本編の The Two Franklins (Boston, 1933) は、ナッシュの「トマス・フランクリンの政治と科学」の翻訳である。又 J. Rydjord, "The French Revolution and Mexico," Hispanic American Historical Review (1929), IX, 60; L. A. de Herrera, La revolución francesa y Sud-America (Paris, 1910) 本編の序文で、アーヴィングの著書を以て終る。又 C. A. Villanueva, Napoléon y la independencia de America (Paris, 1912) 本編の序文で、アーヴィングの著書を以て終る。W. S. Robertson, Francesco de Miranda and the Revolutionizing of Spanish America (Washington, 1907) (in the Annual Report of the American Historical Association) 本編の序文で、アーヴィングの著書を以て終る。C. Parra-Pérez, Miranda et la Révolution française (Paris, 1925) 大部分が本編の序文で、アーヴィングの著書を以て終る。

四國民史

一七八九一一七九九年間の十年紀はフランス以外の諸國の歴史に於ては殆んど正確な意味を持たない。それ故、主要各國に於ける

フランス革命史研究者のために（間崎）

U.S. 十四史の翻訳成書 [解説略] は、大抵の長編書類。

H. Pirenne, *Histoire de la Belgique*, 6 vols. (Brussels, 1900—1926) 総用、大體の歴史を網羅する。歴史的知識の充実した本。

P. J. Blok, *History of the People of the Netherlands*, English trans., 5 vols. (New York, 1898—1912) V. は、即ち大半の歴史を網羅する。H. W. van Loon, *Fall of the Dutch Republic*, 2nd. ed. (Boston, 1924) and *Rise of the Dutch Kingdom* (New York, 1915) トローハの精神にて編纂された歴史的成書。

W. Oechslin, *History of Switzerland, 1499—1914* (Cambridge, 1922) は、スイスの歴史学。

W. E. H. Lecky, *History of England in the Eighteenth Century*, new ed., 7 vols. (New York, 1892) VI, VII. は、評論の色彩を蘊藏する本。

W. Hunt and R. L. Poole, *The Political History of England*, 12 vols. (New York, 1905—1910), X. は、政治史の専門家 J. H. Rose, *Life of William Pitt*, 2 vols. in I (New York, 1924) は、政治家の傳記。

W. L. Mathieson, *The Awakening of Scotland*, 1747—97 (Glasgow, 1910) は、スコットランドの歴史。

A. E. Richardson, *Georgian England*, と D. Hartley and M. M. Elliott, *Life and Work of the People of England*. The Eighteenth Century, 2 vols. (London, 1931) は、

- 社會史と於ける歴史的記述と論を便用した概要。J. B. Williams, A. guide to the Printed Materials for English Social and Economic History, 1750—1850 (New York, 1926) は、英國の歴史書の範囲を越えて重要な問題を渠及べるものを収めたもの。K. Biedermann, Deutschland im XVIII ten Jahrhundert, 4 vols. (Leipzig, 1880) は、州の歴史と州の歴史の間に接する、即ち州史の略式歴史。K. T. von Heigel, Deutsche Geschichte von Tode Fredericks des Grossen bis zur Auflösung des alten Reichs, 2 vols. (Stuttgart, 1899—1911) の種歴史中の此と略歴の 1。此の他、研究室上に於ける歴史的書籍やなべ、次にト歴史書の 1。V. Bibl, Der Zerfall Oesterreichs : Kaiser Franz und sein Erbe (Vienna, 1922) 略歴と歴史的書籍の接觸。社説や小説が使用される場合の歴史的書籍の取扱い。G. S. Ford, Hanover and Prussia, 1795—1803 (New York, 1903); F. Meinecke, Das Zeitalter der deutschen Erhebung, 1795—1815, 2nd, ed. (Bielefeld, 1913). 稍の但書の幅と歴史的書籍の接觸。E. Denis, La Bohème depuis la Montagne Blanche, new ed., 2 vols. (Paris, 1921). 略歴と歴史的書籍の接觸。R. J. Kerner, Bohemia in the Eighteenth Century (New York, 1932) は、同様の歴史的書籍。1750—1761 年間の歴史的書籍や小説が使用される。後編の 1 編は、火災の後編を含む。E. Sayous, Histoire générale des Hongrois, 2nd, ed. (Paris, 1800) は、歴史的書籍と歴史的書籍の接觸。
- Eckart, Short History of the Hungarian People, (London, 1931); R. H. Lord, The Second Partition of Poland (Cambridge, Mass., 1915) は、海賊の軍事長。船頭の士官をも含む。K. Waliszewski, Romance of an Empire (New York, 1894), Story of a Throne, 2 vols. (London, 1895), Paul I of Russia (London, 1913) は、ロシアの歴史とロシアの政治が主張され、その影響を示す。V. O. Kliuchevsky, History of Russia, English trans., 5 vols. (New York, 1911—1931), IV, V, 細分個人的差異がある。歴史的書籍の接觸。R. N. Bain, Gustavus III and his contemporaries, 2 vols. (London, 1894) 歴史的書籍の接觸。A. Franchetti, Storia d'Italia dal 1789 al 1799 (Milan, 1907) は、ナポリの歴史。C. Tavaroni, Storia critica del risorgimento italiano 1785—1870, 9 vols. (Turin, 1888—1897) は、ナポリの歴史。A. Ballesteros y Beretta, Historia de España y su influencia en la historia universal. 西班牙 (Barcelona, 1918—), 帝國主義の接觸。N. Jorge, Geschichte des Osmanischen Reiches, 5 vols. (Gotha, 1908—1913), V; F. Schevill, History of the Balkan peninsula from the earliest times to the present day (New York, 1922) は、ナポリの歴史と接觸。F. Schevill, History of the Balkan peninsula from the earliest times to the present day (New York, 1922) は、ナポリの歴史と接觸。

西歐の「思想」の書籍を紹介する。

III. 思想史

この様な簡単な書誌では『思想史』として何冊かある。廣汎な領域を蔽ふが如き企がなむべきは豈直尠る。著者たるが興味ある如き特殊統一の十数点の書籍を参照すべきである。ノーベルノベ特命にて選出された『思想の歴史』を多少完全に取扱はんとした若干の近著を指摘する所。

I. 人權

- A. Encyclopedia of the Social Science (New York, 1930—) "Declaration of the Rights of Man and the Citizen," の解説 O. Vossler, "Studien zur Erklärung der Menschenrechte," Historische Zeitschrift (1930), CXLI, 516; B. Shickhardt, Die Erklärung der Menschen-und-Bürgerrecht von 1789-1791 in den Debatten der Nationalversammlung (Berlin, 1931).
- B. 権利の歴史
- A. Espinas, La philosophie sociale du 18me Siècle et la Révolution (Paris, 1893); G. de Ruggero, History of European Liberalism, English trans (Oxford, 1927); G. Elton, The Revolutionary Idea in France, 1789-1871, 2nd. ed. (London, 1931); F. Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat, 7th. ed. (München, 1928); B. Mirkin-Guetzvitch, L'influence de

La Révolution française sur le développement du droit international dans l'Europe orientale (Paris, 1929); J. Maras, Ursprung und Entwicklung des Begriffs der Zivilisation in Frankreich, 1756-1830 (Hamburg, 1930); A. Mathiez, "La Révolution française et la théorie de la dictature," Revue historique (1929), CLXI, 304. et seq.; A. Cochin, Les sociétés de pensée et la démocratie (Paris, 1920); A. Favre, Les origines du système métaphysique (Paris, 1931).

II. 政治思想

- J. Morley, Edmund Burke, a historical study (London, 1867); A. Cobban, Edmond Burke and the Revolt against the 18th. Century (London, 1929); F. von Oppenheimer, Montaigne, Burke and die französische Revolution, Bacon: Drei Essays (Vienna, 1928); F. J. C. Hearnshaw, ed., The social and political ideas of some representative thinkers of the revolutionary era (London, 1931); P. R. Rohden, Joseph de Maistre als politischer Theoretiker (München, 1929) 等।
- 海と島の歴史と政治思想の歴史の概要として若干の書籍がある。V. Basch, Les doctrines politiques des philosophes classiques de l'Allemagne (Paris, 1927); M. D. Conway, Life of Thomas Paine, 2 vols. (New York, 1892). 謹啓御鑑定の上、御用へ持て置く事無し。
- II. 政治思想

A. Viatte, *Les sources occultes du Romanticisme, Illuminisme, Théosophie, 2 vols.* (Paris, 1928); A. Monglond, *Le préromanticisme français* (Grenoble, 1930); I. Babbitt, *Rousseau and Romanticism* (Boston, 1919) + *La philosophie de Rousseau et le romantisme français* (Paris, 1907);

E. Seillière, *Le mal romantique, essai sur l'imperialisme international* (1908) + *中国と西欧の文學の發展* (1910)。

G. Brandes, *Main Currents in 19th. Century Literature, 6 vols.* (London, 1901—1923), *革命史研究* (1901—1923); E. Dowden, *The French Revolution and English Literature* (New York, 1897); C. Cestre, *La Révolution et les poètes anglais* (Paris, 1906); C. Brinton, *Political Ideas of the English Romanticists* (Oxford, 1926); C. Schmitt, *Politische Romantik, 2nd. ed.* (München, 1925). G. A. Borgese, "Romanticism" の條 in *Encyclopedia of the Social Sciences*, XIII, 426 (New York, 1934). 稲田の翻訳。

III、明治史研究

トマス・キンの明治史研究の書籍 | の翻訳 Lefebvre, Guyot et Sagnac, *La Révolution française* (Paris, 1930), "La Révolution française et la civilisation européenne," 465—547.

この本リチャードの特徴である。これが立派な参考書田原説、やだに著し共産主義の終焉、藝術的、教育的努力の本を著説が提出

される。しかしカリチャック氏の著述の論議は複雑にして單純に過剰の様に思はれ、『哲理主義』と『經驗主義』の對照が彼に幾分比較的臆病な概括の基礎を與くつる。此の見地は全く大革命の意識的後繼者たる公けの共和學派のそれである。(原)

註記

近刊 (1936年7月10日發行) の『西洋史研究』第九輯に「最近ハノベ革命史研究書目録」(118—140頁) と云ふ小川氏の手になるルツィーネルの紹介文が載つてゐる。本文と相俟つて研究者に有益であらう。併讀せられんことを。なぜその中にはアーチャーの本著の「革命の影響下に於けるヨーロッパの變形」と「ノルマンの中央を置いたものであつ、就中金の説明と構想と比較して由来あるものである」(136—140頁) と記してゐる。